

令和7年度

## 目黒日本大学中学校

## 入学試験問題

## 国語

試験時間 50分

## 注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全15ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名



一
---

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① 長いタビジの果てに、ついに宝物を発見した。
- ② 卒業式のガツシヨウ練習。
- ③ 大雨が予想されるため、出発時刻をハヤめよう。

問2 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 年未年始は車の往来が多くなる。
- ② 旧暦では十二月を師走という。
- ③ 受付の見映えを良くするために花を置こう。

問3 ①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① 弘法□を選ばず

- ア 手           イ 弓           ウ 筆           エ 友

② 蛍□の功

- ア 雲           イ 雪           ウ 光           エ 虫

問4 次の空らんには当てはまる言葉を後から一つ選び、記号で答えなさい。

① 友達とけんかして今すぐく（ ）の居所が悪い。

ア 虫                   イ 人                   ウ 口                   エ 物

② 彼は二才鯖を（ ）いる。

ア 見て                   イ 食べて                   ウ 貸して                   エ 読んで

問5 次の文のぼうせん部のうち、言葉の種類が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア からいものは食べたくない。

イ 今日はまだ何も食べていない。

ウ 彼はいつも朝ごはんを食べない。

エ まさか勝手に食べやしないだろう。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

①「ペプシチャレンジ」という有名な実験がある。

実験ではまず、ペプシとコカ・コーラを、ラベルを見せずに中身だけを被験者<sup>※ひけんや</sup>に飲んでもらう。コカ・コーラ好きだと自認して公言していても、ラベルを見せずに中身だけ飲ませるとペプシを選ぶ、という人が多かった。

一方、ブランド名がわかる状態で被験者にそれを飲ませると、なんとコカ・コーラを選ぶ人のほうが増えたのである。味の好みとブランドの好みは必ずしも一致<sup>いっち</sup>するわけではないのである。

この研究は、ブランドの情報が脳にあたえる影響<sup>えいきょう</sup>を調べたものである。この実験では、コカ・コーラとペプシを比較<sup>ひかく</sup>しているが、ブランドについての知識が実際に味や選好<sup>※</sup>を変容させるということ<sup>※</sup>で話題になったのである。割に広く知られている古典的なりサーチといえるだろう。

自分が好きだと思<sup>※</sup>っているブランドと、ブランドテストで調べた味の好み<sup>※</sup>が一致しない、ということは何を意味するのだろうか。

ブランドによって味の感じ方が変わる人なんて信用できない、同調圧力<sup>※</sup>に負けて自分の好みすら変容させられてしまう、カッコ悪い人、と感じる人も多いのではないかと思う。

この古典的な実験には続きの研究ともいうべき実験がある。なんとこれを脳科学的に検証しようというのである。この研究は、2004年にアメリカの脳科学者リード・モンタギューらによって行われた。

モンタギューたちの研究グループは、被験者を集めて、コカ・コーラとペプシのそれぞれをブランド名が分からない状態で飲んでもらい、その最中の脳の活動をスキャンした。

すると、主観的な快楽を感じるときに活動すると考えられている脳機能領域・腹内側前頭前皮質(vmPFC)が活性化<sup>②</sup>した。興味深いことに、被験者にあらかじめ聞いてわかっているそれぞれのブランドの好みと、ブランドテストで飲んだ味の好みとは、やはり一致しなかったのである。ブランドと、味とを、脳は別々に処理しているということが改めて確認されたわけだ。

この結果をもう少し掘り下げるために、ブランド名がわかっている状態で、被験者にそれぞれを飲んでもらい、脳をスキャンすると、コカ・コーラを好きだと答えた人がコカ・コーラと知<sup>※</sup>って飲むときには、記憶・情動<sup>※</sup>の回路が活性化したのである。

一方で、ペプシではこのような反応が見られなかった。コカ・コーラに特異的に見られたこの反応は、情動に直接訴えかけて判断を変化させるということで、エモーションナル・ブランディングと呼ばれている。

モンタギューたちはさらに、あらかじめvmPFCを損傷していることがわかつている患者かんじやに対して、同じ実験を行った。前述の通り、この部分の活動は、主観的な快楽、そして感情的記憶と結びついている。これもまた興味深いことに、vmPFCが機能しないこの患者たちは、ブランドを明かさないうでテストした場合の味の好みと、ブランド名を明かした場合の好みが変わらなかつた。つまり、ラベルによって、味の好みが左右されなかつたのだ。

くり返しになるが、ブランドやラベル※や第三者のお墨付きすみなど、外部の権威けんいを表す何かによって自分の判断が左右されてしまうことを、人間はなぜかはずかしいと感じる。はずかしいどころか醜みにくいふるまいであり、一部には「クソだ」と断言する人すらいるようだ。しかし、モンタギューの実験からは、ブランドや権威を認知し、これによって選好が変わることは、重要な脳の働きの一つと言いつ得るといふことになる。

いわば、「ブレない人」は「単に前頭前皮質が働いていないだけ」なのかもしれないのだ。

ブランドを認知して活性化する腹内側前頭前皮質は、「社会脳」と俗ぞくに呼ばれる領域の一部であり、いわば社会の空気を読んだり相手の思いを察したりするような機能を担う場所である。この機能が正常に働いているとき、私たちはだれかの思いを無意識的に察し、自分の好みですら蓋ふたをして、考えを曲げ、ブレて、迷う。

考えを環境かんきやうに合わせて微調整びていしゆする、という実に精密なことを脳はやってのけているのに、私たちは同時にそれを「内省」して「はじめる」。人がブレる様子を目の当たりにするとき、私はそれを「X」と思う。高次な機能を駆使くしして、他者と自分との間の心地よい間合いを測ろうとしているのである。カッコ悪いと感じるところか、なんと精妙せいみやうな器官／機関が働いているのだろうか、むしろ感動すら覚えてしまう。

ただ、この機能が働き過ぎていてもまた息苦しい。私たちの社会ではともすれば「ブレない人」空気を読めない人〓みなされてしまいかねないリスクが高い。日本とは④そういう国だ。私が指摘ししてきするまでもなく実感している人は多いと思うが、本当に自分がおいしいと思つていたり、好もしいと思つていたりするものを、空気によって変えさせられてしまう環境というのが、果たして良いものなのか良くないものなのか、なかなか判断は難しい。

私たちの判断の軸じくに「美しい」と「正しい」という価値がある。倫理観りんりかんの源になるような価値基準だけれども、脳機能を見てみると、私たちはこれをよく混同し、区別して考えられないということがわかる。時には無条件に同一のものとあつかうことすらあるようなのだ。物理学の最先端さいせんたんを研究する物理学者ですら「この理論がなぜ正しいとわかるのか」とたずねると「美しいからだ」と答えたりするのである。

このやり取りの中では「美しい」〓「正しい」という無条件の変換へんかんが無批判に行われている。これを、みなさんはどう思うだろうか。

また、物理学者という権威を前にしたとき、それはおかしい、と多くの人は疑問をさしはさむことをためらうのではないだろうか。それこそが、社会通念が規定している権威を重視し、空気を読み過ぎるあまり、自分の意思で能動的な判断をなしていない、ということである。権威の前に思考停止している。自らをはじる人もいると思うが、もちろん、私はそれを脳の高度な自動的な判断だと思うから、非難するつもりは毛頭ない。

ところで、美人か否かの判定尺度も歴史的、文化的（時空間軸）な要素に大きく依存する変化する価値の一つといえる。この変容の頻度と度合いは、「美しい景色」や「おいしさ」など比較的変容の度合いの少ない基準とは異なる機構による認知が働く。変わらないおいしさ、時を経ても変わらない美などのブランド価値は、前述のように腹内側前頭前皮質が判断している。

（中野信子『ペルソナ 脳に潜む闇』）

※被験者……実験などの対象となる人

※選好……選択肢の中から好みに応じてあるものを選ぶこと

※ブランドテスト……商品名を隠して意見をきくテスト

※同調圧力……周囲の人と同じように行動するように強制すること

※情動……一時的に激しくわき起こる感情

※エモーションナル……感情的

※第三者のお墨付き……当事者以外の人からもらった保証のこと

問1 ぼうせん部①『ペプシチャレンジ』という有名な実験」とあるが、この実験からわかることは何ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ラベルを見ずに中身を飲んでも被験者は普段から好きだと思っているものを自然と選ぶという結果から、人間の味覚は脳と密接に結びついた非常に優れた感覚器官だということ。

イ ブランド名がわかる状態で被験者に飲み物を飲ませると正常な判断ができなくなるという結果から、人間の脳は印象に左右される非常に頼りない器官だということ。

ウ 自分が好きだと思いついて飲んでいるブランドと味覚の好みが必ず一致するわけではないという結果から、ブランドに関する情報が味の感じ方に影響を与えているということ。

エ ブラインドテストで調べた味の好みと自分が好きだと思っているブランドが一致しないという結果から、同調圧力に負けて自分の好みを変えてしまう人がたくさんいるのだということ。

問2 ぼうせん部②「興味深い」とありますが、何が興味深いのですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 脳科学的にみても、人間は味とブランドとを別のものとして処理しているという点。

イ 自分の好きなブランドの飲み物を飲むと、脳のある回路が活性化されたという点。

ウ 古典的な実験で事実とされてきた内容が、脳科学的な視点で否定されたという点。

エ ブランドがわからない状態で飲み物を飲むと、脳が正常な判断を拒否するという点。

問3 ぼうせん部③「外部の権威を表す何かによって自分の判断が左右されてしまう」と同じ内容を述べている部分を、これより後の本文中から十三字で探し、抜き出して答えなさい。

問4 空らん  X に当てはまるものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ちよつとうちやましい      イ 少しもつたない  
ウ 実にくいたらしい      エ とてもほこらしい

問5 ぼうせん部④「そういう国だ」とありますが、どのような国ですか。次の空らんに合うように考え、十六字で答えなさい。

自分の意見を  十六字  ことがある国。

問6 ぼうせん部⑤「美人か否かの判定尺度も歴史的、文化的（時空間軸）な要素に大きく依存する変化する価値の一つ」とありますが、このよう  
な「変化する価値」の具体例としてふさわしいものを次の中から全て選び、記号で答えなさい。

- ア 現代の日本では鼻が高いともてはやされることが多いが、欧米では悪口ととらえられることもある。  
イ 恋人の条件として見た目を重視するか性格を重視するかは、人それぞれの好みによつて異なる。  
ウ かつて日本には歯を黒く染めるといふ化粧法があつたが、幕末に日本を訪れた欧米人には非常に驚かれた。  
エ 昔好きだった人とひさしぶりに再会したが、なぜか当時と同じような魅力を感じることができなかつた。  
オ かつての日本では着物などの和装が着用されていたが、現代では日常的に着用されることは少ない。

問7 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 考えを環境に合わせられる人は、複雑な物事を丁寧に処理するために脳の余計な機能を停止させている。  
イ 考えがブレて迷っている人は、高いレベルの脳機能を使って相手との距離感を測つていけるといえる。  
ウ 自分の好みに蓋をする人は、他人から好意を持たれやすく良好な関係を築くことができる。  
エ 社会の空気を読まずに行動する人は、自分の考えを貫いて結果的に周囲に感動を与える可能性がある。

### 三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

翌日、ミーティングなど外回りの仕事を終えて銀座のオフィスにもどったのは、夕方四時すぎだった。そのまま休むひまもなく、来月発売される女性誌のタイアップ企画の写真をチェックし、週末に届いている大量のメールを確認し、早急な返事を要するものには随時レスポンス、中には時候のあいさつを必要とするような人もいて、一時間、二時間はあっという間に過ぎてしまう。

社長室のとなりにある広報企画部には、六名の社員が常勤している。たとえば主任の宮本さんは二年ほど前に、ロンドンのハロッズから引きぬかれてきたらしい。他にもタイムラー・クライスラーで働いていた者、某有名美術館で学芸員をやっていた者など経歴は多彩で、とにかくそのほとんどが、錚々たる企業から中途採用または引きぬきでこの会社に来ており、新卒でこの部へ入社した者は私しかない。

メール返信を一段落させて、自分用にコーヒーをいれていると、廊下を歩いてくる社長の姿が見えた。

「あ、社長、すいません」

あわてて声をかけ、廊下へ飛び出した。

「忘れものしっちゃったよ、忘れもの」

ラインのきれいなタキシードを着こんだ社長が、そう言いながら社長室へとかけこんで行く。

「ル・モンドの取材、十九日でだいじょうぶだそうですね。三時にパークハイアットに部屋をおさえましたから」

社長を追いながら、私は早口で告げた。ここで報告しておかないと、またいつ会えるか分からない。

机の引き出しを開けて、何やら引っ張り出していた社長が、「ああ、分かった。十九日だな」と答えたあと、「え？ ル・モンド？」とおどろいたように顔を上げる。

「そうですね。この前、話したじゃないですか。ほら、MODE2004って欄で、日本を特集するからって」

「ああ、あれか」

社長はやつと取材内容を思い出したらしく、また引き出しの中を探し始めた。

背の高い社長には、黒いタキシードがよく似合う。タキシードというものは、ふつうに立っているときにはだれにでも似合うように作られているのだらうが、その真価が問われるのは、このように上半身をかがめて何かを拾うような動作をしたときなのかもしれない。その点、うちの社長はい線いっているような気がする。

「どうだ、仕事は慣れたか？」

首をかしげて社長のおしりをながめていると、社長にとつぜんそうきかれた。

「え？ 仕事ですか？」

「そろそろ三ヶ月だろ」

「正直なところ、いろんなことが目まぐるしく動いてるだけで、自分が慣れたのかどうかも分かりませんよ」

素直にそう答えると、やっと探していたものを見つけ出したらしい社長がすつとからだを起こし、「仕事に追われちゃだめだよ。逆に、仕事を追わないと」と笑いかけてくる。

「簡単に言いますね」と私も笑った。

「僕はね、残業なんかしてほしくて君を選んだわけじゃないからね。残業するひまがあつたら、映画でも芝居でも展覧会でもなんでもいいから、そういうものを見て回らないと」

「分かってますよ。分かつてはいるんですけど……」

エリザベス西田が社長室を突っ切つてしまいそうな勢いで部屋の中につけこんできたのはそのときだった。

「あれ、社長、まだ出かけてなかったんですか！」

エリザベス西田は相手が社長といえども容赦がない。

「すぐ出るよ。ちよつと、忘れものして」

社長の言い訳を聞きながらもエリザベスは腕時計を見て、パーティー会場までの時間を計算したらしく、「十五分ほど遅れますって、私のほうから連絡入れておきますから」と早口でまくし立てた。

「えつと、それから、あ、そうそう、新堂さん」

いきなり矛先が私に向かい、エリザベスがにらみつけてくる。この人に名前を呼ばれると、思わず反射的に謝つてしまいそうになる。

「秋の個展企画に、早乙女春暁を呼ぶなんて書いて出したのあなた？」

エリザベスがそう言つてつめ寄ってくる。我が社はアパレルメーカーながら、銀座の一等地に立派なギャラリーを持っている。正直なところ、下手な美術館なんかよりは、よほど洗練された展覧会を毎回開いており、海外のメディアからの問い合わせも多い。

「え、はい。私です。……な、何か不備な点でも？」

「不備な点って……、あなた……」

③ エリザベスがため息をつき、パンプスの先でコンコンと床ゆかをける。

「早乙女春暁なんて、本気で呼べると思ってるわけ？」

「いや、あの、呼べればいいなと……」

「早乙女春暁を呼ぶくらいなら、ゴダールを呼ぶほうがまだ簡単よ」

エリザベスがあきれ切ったようにため息をつく。

早乙女春暁というのは生け花界の※たか大家で、美しい花を生けるといふよりは、腐くさりかけた花びらをクリスタルの花びんにつめたり、腐ふ乱らんの美学を追求している芸術家だ。どちらかという和日本よりも海外での評価が高い。

「とにかく時間ないんだから、実現しそうな企画出してよね。交渉こうしょうに時間だけ取られて、結果、実現しませんでしたじゃ、どうにもならないんだから。いい？」

エリザベスにまくし立てられ、思わず、「はい」と答えそうになったとき、横で話を聞いていた社長が、「早乙女春暁、いい選択せんたくだよ」と声をかけた。

「だって、社長。どう考えたって無理じゃないですか？ そりゃ、うちで企画して個展が開ければ画期的ですけど」

「とにかく、やる前からあきらめるのはもったいないよ。この企画出したの、新堂くんなんだろう？」

とつぜん社長の視線がこちらに向けられ、「え、はい」と私はうなずいた。

「だったら、この企画、とにかく一度、新堂くんに任せてみれば」

社長がおだやかな笑みを浮かべて私を見ている。

「でも、社長……」

ふり返らなくても、背中にエリザベスのするどい視線がつきささっているのが分かる。

さすがにこれ以上、ぐずぐずしているわけにはいかなかったのか、「とにかく、今回は新堂くんに任せてみようよ」と社長が無責任なことを言つて足早に部屋を出ていく。

気がつけば、社長室にエリザベスと二人。何を言われるのかと身構えていたのだが、エリザベスは「ふー」と大げさに息をはくと、そのまま私だけを残して部屋を出ていった。

あ、ちよつと……。

思わず声が出てしまう。企画書を出せと言われて、最初に思いついたのが早乙女春暁の名前だった。もちろん彼の作品は好きだが、あとは任せたと言われたところで彼につながるつてなどない。

どうしよう……。いや、ほんとにどうしよう……。

その日、桂子※ひげこから電話がかかってきたのは夜の九時ごろだった。「今、銀座にいるんだけど、もし晚ごはんまだだったらいっしょにどう？」という誘いで、昼にサンドイッチをひとかけら食べただけだったので、誘われた瞬間しゅんかんにグウーとおながが鳴った。それから三十分ほど仕事に切りをつけ、待ち合わせたイタリアンレストランへ向かった。

桂子とは最近よくいっしょに食事をする。初めて会ったのは剛志※つよしおじさんの店だったが、その後もおたがいの仕事柄がら、いろんなパーティーで顔を合わせることも多く、また会社が近いこともあって、いつの間にか残業中のぬけ出し仲間になっている。

レストランに着くと、すでに桂子は席にいて、いつものようにペリエを飲んでいた。

「すいません、この前は。ほんとに助かりました」

拝むように手を合わせて私が近寄っていくと、「平気、平気。あの先生には貸しがあつたから」と桂子が笑顔をうかべる。

つい先日、我が社が催した美術展のため、ある有名な大学教授にコメントをたのんだのだが、受け取ったそのコメントがあまりにもつまらなくて、つい「もうちよつとちがう角度からのコメントをお願いできませんか」と原稿げんこうをつき返してしまったのだ。これが教授の逆鱗げきりんにふれてしまい、エリザベスからは怒られるし、教授を紹介してくれた出版社の人からは泣きが入るし大変な目にあつた。そこをうまく取り持ってくれたのが桂子だった。

「だって、ほんとにつまんなかつたんですよ、そのコメント」

まだ怒りが収まらずに私が言うと、「まあ、まあ」とそれを制した桂子がメニューを広げてくれる。

《中略》

桂子とレストラン前で別れたのは、午後十一時過ぎだった。てっきり帰宅すると思っていたのだが、桂子もまた、会社に仕事を残したまま食事に出て来ていたらしく、「それにしても、銀座で食事した女が二人、十一時から仕事にもどるつてねえ」とつぶやきながらも、お互いにまだ元気な足取りで横断歩道をわたった。

わたったところで桂子と別れると、私はその場で大きくのびをした。ずらつと並んでいるタクシーの運転手がそんな私をちらつと見て、にこつとほほえむ。真夏の銀座の夜はちようど夏祭りが終わったあとのような、どこか牧歌的な雰囲気がある。

今日は改まった打ち合わせがなかったので、自社のシャツは着てこなかったが、基本的に我が社では出勤時には自社服が義務づけられている。ただ、一着数十万円もするジャケットや、軽く十万円を超えるシャツを、いくら社員割引があるからとはいえ、そうそう新入社員が買えるわけもなく、日ごろは色柄豊富な自社のスカーフでごまかしてしまうことも多い。もちろんスカーフ一枚にしたって、簡単に手の出る値段はついていない。この会社で働くようになって、いわゆる一流の品物に囲まれて仕事をするようになったのだが、元は千葉の田舎のヤンキーながら、一つだけ気づいたことがある。

本当にいいもの、たとえば本当にいいシャツだとか、スカーフだとか、くつだとか、グラスだとかは、ある一瞬を、それを身につけているかないかで、劇的に変えてくれるのだ。もちろんブランド崇拜をしたいわけではない。ただ、たとえば街角で、ふつとスカーフが風に飛ばされたとして、それがエルメスのスカーフだったか、それとも近所で買ったスカーフだったかでは、印象は大きくちがう。ファッションというのは、だれかに見せるためのものではなくて、まずは自分に見せるものなのだと思う。そしてだれよりも自分を見ているはずの自分に、本当にいいものを身につけさせてやることは、決してむだなことではないような気がする。

会社に向かう道すがら、そんなことを考えながら歩いてみると、パンプスのかかとで排水溝のふたのへこみを踏んでしまった。思わず、「きゃつ」と声を上げて、横にあったガードレールをつかんだのだが、運良く周囲に人はいなかった。私は素知らぬ顔で体勢をもどして歩き出した。そして、『そうなのよ、こういうときに、もし上質なサテンのシャツを着ていれば、やわらかなシャツはきつと優雅に波打ってくれるのよね』などとまるで自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

(吉田修一『ひなた』)

※随時レスポンス……「その都度返信をする」という意味。

※ロンドンのハロッズ……イギリスのロンドン市にある世界的に有名な一流デパート。

※ダイムラー・クライスラー……ドイツのダイムラー・ベンツと米国のクライスラーが合併して成立した自動車メーカー。

※錚々たる……すぐれたことや人が多いこと。

※中途採用……すでに職業経験のある人材を入社させること。なお、これに対して、職業経験のない高校や大学卒業予定のある人材を採用することを

「新卒採用」という。

※大家……ある分野で、特にすぐれた学識や技術をもっている人。

※桂子……「私」の恋人の兄嫁にあたる人物。ある広告会社に勤めている。

※剛志おじさん……「私」の恋人のおじにあたる人物。

問1 ぼうせん部①「時候のあいさつを必要とするような人」とはどのような人のことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で

答えなさい。

- ア 定期的に連絡を取り合う必要のある人
- イ 人一倍丁寧に対応しなければならぬ人
- ウ ざつくばらんな付き合いを求めてくる人
- エ 気持ちをこめた言葉を贈りたくなる人

問2 ぼうせん部②「容赦がない」とありますが、これはどういうことを表している表現ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア エリザベス西田が、社長がどれだけ謝ってもゆるそうとしないということ。
- イ エリザベス西田が、社長に対しては常に強気な態度をくずさないということ。
- ウ エリザベス西田は、相手の立場がどうであろうと公平に接するということ。
- エ エリザベス西田は、相手が敬うべき立場の人でも強い物言いをするとということ。

問3 傍線部③「エリザベスがため息をつき、パンプスの先でコンコンと床をける」とありますが、このときのエリザベス西田の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何度も同じミスをおかしてばかりいて、いつこうに成長しない「私」にうんざりする気持ち。
- イ 社長といい「私」といい、自分の思うとおりに動けない周囲の人間に対して心配する気持ち。
- ウ 仕事がいそがしい中、実現は不可能であろう企画を出してきた「私」に対していらだつ気持ち。
- エ 自分には思いつかないような、新鮮な企画を出してきた新人の「私」をいまいまして思う気持ち。

問4 ぼうせん部④『ふー』と大きさに息をはくと、そのまま私だけを残して部屋を出ていった」とありますが、このときのエリザベス西田についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が苦言をていした直後に社長が「私」に任せてみようと言ったことによる、バツの悪さをごまかしている。

イ 「私」の浅はかな考えを改めさせるべきなのに、「私」に任せてみようと言ってしまった社長にあきれている。

ウ 以前から社長に信頼されている「私」に痛い目をみせてやろうとしたことが失敗して、悔しい気持ちを押し殺している。

エ パーティーに遅れそうな社長に対するいら立ちを、「私」にもぶつけられたことで一息つくことができている。

問5 ぼうせん部⑤「一つだけ気づいたことがある」とありますが、ここで「私」が気づいたこととして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ある一瞬を劇的に変えるためには、一流のものやブランドものを身につけていることが必要だということ。

イ 身につけている物がブランドのものか近所で買ったものかという違いで、周囲からの印象は大きく変わるということ。

ウ ファッションとは、誰かに見せるためのものではなくて、まずは自分に見せるものなのだということ。

エ 誰よりも自分を見ているはずの自分に、本当にいいものを身につけさせてやることは何よりも大切なことだということ。

問6 本文の内容の説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」は周囲と比べて経験が浅く、思い付きでの行動によってエリザベス西田からしかられたり仕事相手の大学教授をおこらせたりなど失敗が多いが、理想を持ちながら仕事に取り組んでいる。

イ 社長は忘れ物をしたりエリザベス西田から急かされて言い訳をしたりするなど一見情けない姿は見せているが、タキシードが似合う外見や仕事を任せてくれる点で、「私」からは信頼されている。

ウ エリザベス西田は心の中では新人である「私」を認めているが、早乙女春暁の個展企画や大学教授との件など会社の不利益を生み出してしまふ部分はしっかり指導しなければとあえて厳しく当たっている。

エ 桂子は「私」を食事にさそってなぐさめてくれたり仕事のサポートをしてくれたりする、エリザベス西田とは正反対の優しい人物であり、一流の社会人として「私」のあこがれる存在である。

問7 二重ほうせん部「もし上質なサテンのシャツを着ていれば、やわらかなシャツはきつと優雅に波打ってくれる」とありますが、この「私」の考えにしたがい、『もしく（いれ）ば』の部分に他の事例をあてはめて別の文を作りなさい。なお、左の《解答例》を参考に、本文の内容をふまえて、以下の条件にしたがい、書きなさい。

【条件1】「上質なサテンのシャツ」にあたるものを明確にすること

【条件2】『もしく（いれ）ば』以降の内容は、『もしく（いれ）ば』の内容とのつながりを持たせて自由に考えること。

《解答例》もし職人が手作りをした和傘があれば、うつつしい雨の日も趣のある一日になる。

以下余白





—